

中院通茂『未来記雨中吟聞書』翻刻 (四)

藪本祐子・大山和哉
中島真理・中村健史

前号に引きつづき、中院通茂『未来記雨中吟聞書』の翻刻を行う。本号に掲載するのは十一月二十八日講釈『雨中吟』(全十七首、講釈の日付については次頁【注】参照)の注である。大方のこゝ示教を乞う。

〈翻刻〉

廿八の□*

雨中吟

祇抄別抄「此十七首は未来記と同事には侍れど、別に此名を雨中吟と号する事子細有之。此書は名の外に躰なく、躰の外に名なしといへり。此躰は雨声暗明の躰ともいへり。風躰のあしきをしめむの教也。たとへば霖雨のものむつかしく、うちおほふやうにして、くらきかともればあかく、明らかなるかとみれば又くらくなり、朦々としていひしらず、心ちもたど／＼しく、うちしめり、憂もそひて物むつかしき心ある也。此十七首の哥、みな心たど／＼しく、ことはりみえがたく、心詞とをらず、む

〈凡例〉

- ・読者の便を考慮して、『未来記』『雨中吟』本文には歌番号を付し、引用文に適宜「」を加えるなどした。
- ・字体は通行のものに統一した。
- ・私に濁点を施した。
- ・朱字は、ゴシック体、見消ちは―某―、補入された文字は(某)、虫損等は□のかたちであらわした。
- ・底本における書入れ・改稿などを誌面上で正しく再現しえない場合には、一部を注のかたちで示した。

すばるゝやうにて、詞をもく、さはやかならず、物い
ま／＼しき心あるを、雨中にたとへて雨中吟といへる也
云々。

以之思之に、未來記はめづらしく花やかにせんとして異
様に成たる哥なるべし。この雨中吟は案じ過して心気鬱
し、人過てあらぬ所へ行たる哥なるべし。毎月抄にいへ
る「人ほがのみかへり哥」なるべき歟。此哥共風林あし
きにてこそあれ、此界にはよく／＼思入て思案せずして
は至りがたき事也。気色などあしき時節にしゐてふかく
案ずれば此堺ちかく、風林物むつかしくうきやかならで
うればしくなる事おほき也。

【注】本稿(二)〈成立〉においては、通茂邸での『雨中吟』
の講釈日を「二十某日」としていたが、その後、大阪市立
大学蔵『未來記雨中吟聞書』に「二十八日」の記載が見え
ることを知った。同書は通茂邸の講義を門弟松井幸隆が筆
録したもので、『雨中吟』の注では、冒頭に十一月二十八日の
日付が記されるのみである。すなわち通茂は、二十八日に
自邸で『雨中吟』十七首すべてを講じたのち、十二月十二
日(序々3番歌)、十六日(7番歌々跋)の二度の仙洞講釈
に臨んだものらしい。本誌二二号参照。

1 またれゆく光もをそき月よりも雨にきこゆる萩の音載

祇抄「此作意は、またるゝ月の為よりも雨に萩の音のき
こゆるがかなしきとよめるにや。たとひさにこそ侍らめ、
更にたしかにもきこえず。殊に下句のさま、うればしき
林也。定家卿近代秀哥の詞に「後学の人の哥はやすかる
べき事をちがへ、はなれたる事をつゞげんとする故に、
哥のさまよろしからざる」よしをの給へり。尤大切の教
也」云々。

「またるゝ月のためよりも」といへる抄の義、又たしか
にきこえがたきやう也。此心は、月のをそく出るをまち
わぶる心から、萩の音までも雨かときゝなざるゝといへ
る心なるべき歟。月よりもといへるは、月からと云心に
て、月ゆへの心也。此よりももの字、きこえにくき
字也。心を入てよくきけばきこゆるやうにありて、又き
こえざるやうにもあり。むつかしきもの字□。月を切に
待わびたる出がての空は、雨にやなるべきなどや、か
くやと思ふから、萩の音まで雨になりたるかときゝなし
たる心、尤浅からざる作意也。されども余ふかく人すぎ
たる趣向也。よく／＼ふかく思案なくては、こゝまでは
案じ人がたかるべし。然れども、またれ行光もをそきと
いひ、雨にきこゆると云詞のつゞき、をもく、打しめり、

物むつかしき風躰、誠雨中吟ともいひつべ[□]。二条家の教には、五尺の菖蒲に水をそゞぎたるやうによめとをしふる事也。奇麗にのびやかにして、すぐしく、さは／＼といひくだせとの心なるべし。それに又思ひくらべて此吟の句作を吟ずれば、をもく、物むつかしく、句つゞきやすらかならざるは、皆そのうら也。かへさま也。^{*}またれ行と云も、またるゝといふやうにはなく、をもく、うき／＼とせざる也。光もをそきと云もをもく、三句のよりもと云も又をもし。二句三句はつゞきによりてさやうにはきこえざる事もあるべけれども、此つゞきにてはうれはしくきこゆる也。雨にきこゆるも又おなじ。如此のつゞき、数反吟じて味へばその風味しらるゝ也。

【注】この段落の行間には墨字で左のような補記がある。

これによりて詠哥大概の哥共みるに、いづれも奇麗にして、しかもすぐしくつゞけたる哥ども也。むつかしきやうなる心の哥も、みな詞ねぢけたる所なし。

うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとはいのらぬもの[□]。

ウカリケルトイヒ人オハツセトイヒ、山オロシ(ヨ)トイヘル、コデ／＼トシタル様ナレドモ、其理正シク奇麗ニウキ／＼トシタル物也。

定家卿ノ褒美ノ詞ニ、「詞心ニマカセテ」トイヘル所、カヤウノ心ナルベシ。ヨク／＼心ヲ付ベキコト也。

2 うちしめり薄のうれはおもりつゝ西ふく風になびく村雨

西吹風は秋の風なるべき歟。むら雨にぬれしめりたる薄のおもげに雨につれて風になびきたる躰を、かくよめるにや。なびく村雨は、雨の風によこたひふれば薄もなびくを、うれによせてなびくむら雨といへるなるべし。うれ葉は上葉也。惣而うれ葉と云詞は好まざる詞也。此哥、句ごとにうきやかならず、をもくしめりたる句つゞき也。されども風景は、雨中の薄の躰みるがごとくなるさま也。それによりて風雅集にも入られたるなるべし。定家卿、如此かき出して、いましめられたる哥を撰集に入らるゝ事難心得事也。此哥のみならず、此末のそよくれぬるならのこのはの哥、峰の雲麓の霧の哥、玉葉に入たり。すべて玉葉風雅兩集の哥のかゝり、ことば、さかひ、此哥の躰もおほきなり。為世卿、為家(卿)の教をまもり、正風躰によめるを、為兼、ふるめかしく、もどかしくみなし、一きはあたら

しくよみなさんと思ひて、寛平以往の哥こそ本意なれ、近代の風躰は下品なりとみくだして、制の詞などにもかゝはらず、思ふまゝによまれたれども、漸此未來記のさかひに入たちて、此哥を撰集にまで入らるゝ事、寛平以往はいふに及ばず、俊成、定家卿の眼までも、とゞかざる事はるかなりとみえたり。

こゝにて定家卿の名誉みゆる事也。末世には必此やうなる風躰を好べしと云事を先知してよみをかれたるに、はたして七八十年以後、其曾孫為兼、此風を好て勅撰集にまで被人こと也。定家卿、末世の学者の胸中をみぬく事、手にとるがごとし。か様の事は凡慮のをよぶべききはにはあらず。不可思議なる事也。既此風世に行はれ、伏見院、後伏見院、花園院まで被遊し也。後普光園撰政（皇朝）、頓阿いでゝ天下の風をよみなをし、青蓮院宮（皇朝）、後普光園撰政（皇朝）申沙汰にて、後光嚴院初て為定卿の風を被遊、御流の伏見院様を捨られて、天下二度二条家の流に成たるは哥道の糸すぢの切はてざる所也。是大切の事也。當時も地下の者共、異風なる哥どもよむもみえたり。諸家の哥、尻よはに成なば、つゝのりて発興する事あるべき也。よく／＼此哥どもをみしたゝめ、誠を守りて風躰を横せず、当流をとりくださぬやうにこゝろざしをたて、はげまん事、学者の肝心なるべし。

3 夢くらきしらぬ外山の鹿の声さむる枕の雨にたぐひて

此哥、しらぬと山の鹿の声といへる、難心得。もしこれは夢中の事なるべき歟。半睡半覚の枕のうへにうつゝともなく聞たる鹿の声（の）、やがて夢に入て、いづくともしらぬ外山に鹿のなくとみえたる夢の、さめたる枕もおなじしかの声の、雨に和たぐひしてきこゆるを。（さむる）枕の雨にたぐひて夢くらきは、雨夜ながら見たる夢なるべし。かやうに彼方此方こゝろをまはしてきけばきこゆるやうなれど、夢くらきしらぬと山、やすらかにきこえざる也。

定家卿

「まどろむと思ひもはてぬ夢ちよりうつゝにつゞく初雁のこゑ」

此哥、趣向同じやうなれども、よくきこえて面白也。此夢くらきしらぬ外山といひ、鹿の声さむるとつゞけたるは、とつてもなきつゞき也。趣向はおもしろけれども、したてさはやかならざれば、うれはしくきこえて面白はおもはれざる也。

4 秋は行雨はしづくに降しめて袖のしりける夕ぐれ

此五文字、秋はゆくと言たる本多し。又行の字を書たるもあり。此五文字、秋はゆきなるべし。尤雨中吟なれば句がらのあしきことはりなるべけれども、秋はゆくとはつゞきそむなくきこゆる也。雨に霁にといへる詞、難心得。行の沙汰もなければ、霁は袖のしづくにて涙の事なるべき歟。降しめ(り)(たる雨に涙の和して、袖もしめり)(あひ)たれば、袖のしりけるといへる歟。暮秋雨中の夕のあはれ本札は、しめりたる袖のしりたるといふ心歟。名残と思秋はゆき、うき雨は袖のしづくにしめりあひて、はれやらぬ夕ぐれのかき哀をよくしるものは、此袖にてこそとあれとよめるにや。かやうにふかく思入て、雨は霁にふりしめてといひ、そでのしりけると云出せる味ひは、大かたの人の思入べききはにもあらぬ趣向也。誠感あるべき哥なれども、此したてにてはさもなき也。雨は霁も袖の霁ときこえがたく、袖のしりけると云も一くせありて、むつかしきいひやう、いひおほせてもきこえず。吟うればしく、打しめり、物むつかしくきこゆる也。秋はゆき雨は霁といへる、はの字二つあるも、常にある句法なれども、これはをもく、うればはしくきこゆる也。袖のしりけるも面白句がらなれども、しめ

りていやなる所あるなり。

5 いく里の雲に心のかよふらんうかぶとかこつ月は雨にて

月のまへにこよひ雲のうかびたるを、よひの程はうきものにかこちしが、その雲はつゐに雨になりたれば、いく里人の心がこよひの月(の)雨になりたる雲をうらむる心、おなじそらにかよふらんと云心也。かよふは此雨を遺恨に思ふ心、いく里人の心一同ならんと云心にや。一同にうらむる心のかよふ也。こゝろの通ずる義也。第四句、雲にとをき故、何がうかぶやらんと思はれて、雲のうかぶとはきこえがたし。雲のうかぶといふもきゝよからぬ(に)や。月は雨にても優ならず。上句はさして異様にもあらざれども、雲に心のかよふらんといふも、うらにかよふといふやうにはなく、やすらかにはきこえざる也。

6 くれの秋はしにしたゝるよるの雨草の庵の内ならねども

「三秋而宮漏正長夜 空階雨滴 万里而鄉園何在 落葉
窓深」愁賦

又

「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」白

此兩首の詩を取合、上下に用たる也。暮秋の夜ながき雨のあはれは、宮中といへども、草庵の雨の中にもおとらず物さびしき心を、うちならねどもといへり。詩の二句の外更に別事なければ、一首の心にきては咎なかるべし。されども暮の秋といへる、三秋の心なるべけれども聞よからず。秋のくれといひては暮秋になるゆへに、(三秋の心にて九月の心に用たさに)くれの秋といへるにや。秋のくれといひてもおなじ事也。

はしにしたるも、詩の詞ながらうつくしからず。よるの雨はさのみきくにもなけれど、てにをは下になきゆへ、つまりて一句／＼切々にきこゆる也。又結句よはきゆへ、下句うれはしきやう也。上句もうき／＼とはせざる也。此哥は古事或詩の心詞などばかりとりて、道具にたづさはり、かゝはり、みづからの作意を疎にする哥人をいましめたる心もあるべきにや。雪しろし曉ふかく入苑といへる哥と同躰也。されどもこれはそれよりも詞をもく、風躰ものむつかしく、しめりたる也。

7 をやみせず雨夜の空になく涙もりぬしほりぬせく方も
なし

祇抄「此哥のことばつかひ、しほり過て感なくこそ侍れ。もるは雨、しほるは涙也」云々。をやみせずと云は涙の事にて、雨もをやみなきなるべし。さるによりもりぬしほりぬせくかたもなしといへるにや。心は雨中の恋などの心歟。
或抄「初五文字、きくにくし。雨夜のそらになく涙もきよからず。もりぬしほりぬなども、いかにぞやきこえ侍り。上下の詞、ともにきよからず」云々。尤其躰うれはしき也。

8 星もなく雲間もみえぬ雨の夜に猶またるは山のはの
空

星もみえざる雨天にも、猶わすれず山端の雲まもありやとながめて月を待心、深切也。されどもあまりなる趣向にや。又山のはのそらは、そらといひても月の事きこゆるゆへ、月といひてはめづらしからざれば、わざと空としたるにや。されども月なれば無様にきこゆる也。

石清水若宮哥合 江上霞

祝部成茂

「水上やきしの柳の深みどりかすみのみをのしるし成けり」

定家卿判云「水上、岸などいへるに、河の心は侍らめど、題の字の中、山川田野のたぐひはかならずその字を哥の面によみすふべしと、むかしならひて侍り」とあり。然れば、月など、月と出さでまはしてかやうによむ事はあるまじき事なるべき歟。それによりてこゝに月とはよまざるにや。

星もなくといへる、面中句端の事なれども、ふと星もなくとうち出たる、なだらかにはあらず。

抄「こゝまで八首、雨を詠ぜる心は雨中吟の名をかたどる義也。此末雨ならぬ哥も心詞たしかならずで、物のよしきこえ侍らぬは、雨中のさま也」。或抄「残りも雨をばよみ侍らねども、こゝろは雨声暗明の躰也」。

9 つれぐと山路露けき秋風に日影ひとつにかよふ春かな

秋風の音に山路露けきつれぐの山中は、みじかき秋の日影も物さびしく、くらしがたき事は、たゞ遅目ををくるや

うにおぼえたる日ながさを、日影ひとつにかよふ春哉といへり。抄に「詞づかひ、句のうつりはさして咎なし」

云々。詞づかひはさしてみぐるしき事もなければ、日影ひとつにかよふ春哉、いひたてたる趣向ねぢれて、入ほかともいふべき也。尤きこえがたき方なるべし。其上詞づかひ咎なしといひながらも、句うつりうちしめりてきこゆる也。上句はさしてうれはしくもきこえざれども、下句うきとときこえざる也。それゆへ一首を吟ずれば上句もうれはしき方にきこゆる也。又二三句のに文字、かしましき也。

此等の哥、よく／＼ふかく思入ずしては、こゝまでは案じいりがたき趣向也。その人過（し）たる所、すなはち人ほかといふ物なるべし。

10

五五二
そよくれぬならの木葉に風吹て星出る空のうす雲の影

抄「そよとはげにといふ心なれども、そよくれぬの五文字聞よからず。ならの木陰などはあれども、ならの木葉うけられず。又うす雲の影もきくにくや」云々。

一首の心は、ならの木に風吹て、うす雲の空に星の出たる夕ぐれの風景は、おもしろくしたてたる哥也。*されど、

ならの木葉うけられずといへることく也。風ふきてと云も常の事なれど、かぜたちてなどいふやうにはなく、ひらめにてきゝにくし。聿も来(星出るといへるも、上に雲の沙汰なきゆへ)ふとしたる出やう也。空の字は雲につき、影の字は星の影なるべきを、顛倒したるもやすらかならずや。此哥は風躰しなへたるやうにはなくて、詞づかひ異様につゞけなしたる哥也。

【注】このくだり、行間に朱字で左のような補記が施されている。補入記号の位置などからすると、全体を「……おもしろくしたてたる哥也。其故玉葉集雜二に入たる歌。ならこのは、さしたる事はなけれども、聞にくゝ、風ふきてと云も……」と改稿することを示したもののか。

其故玉葉集雜二に入たる歌。ならこのは、さしたる事はなけれども、聞にくゝ、

11 たへてこそ山のふかきはながめつれ秋にわびぬる長夜の霜

此二三句は夕などの景気なるべき歎。うき深山の秋の夕はたへてながめきたりたれども、霜夜のよながさは

何ともたへがたく、わびしきよしをいへるにや。山のふかきはと云は文字おもく、上にたへてこそといひて、ながめつれと云るもよはくておもし。秋にわびぬる、に文字きゝよからず。一首の吟、うきゝと云きこえず。うれはしき也。されどもさきゞの哥どものやうにみぐるしくはなき也。こゝに入ればこそか様に難をも見出したれ。さもなくは子細なきにしても、をくべき哥也。かやうにまぎらはしきは、ことに沈吟してその味をよくなめしりて、可忌憚事なるべき歎。心詞につき、尤入ほがの浅深はあるべけれども、心のおもむきのあしきみちすぢは、いづれの哥もおなじ。

ふりあしき気味あひの根をよく合点すれば、その浅深見わけしらるべき事也。

12 五言下 峰の雲麓の霧に色かれてそらも心も秋の松かぜ

此哥の心、たしかにきこえがたし。秋の興あるべき木草の色は、雲霧にうづもれたる夕ぐれに、たゞ物さびしき松風の音のみ身にしみわたりに、かなしき空のけしきなれば、そらもこゝろも秋の松かぜは、空の秋もたへがたく、

心もうれはしき心にや。しるて推量すればかくもあるべきかとみゆれども、たしかにはあきらかならず。これ人ほがのみかへりたる所歟。又いひさしかけらしたる歟。色くれての詞、聞よからず。秋の松かぜ、又いかゞ。松の秋風は常の事也。これも夕ぐれの秋、曙の春の類歟。

13 秋ならず物を思はぬ空までも契りよしなき夕暮の鐘

此哥の心、たしかにきこえがたし。夕ぐれの鐘の哀をいひたてたる哥なるべき歟。夕のかねのあはれは、秋にもあらず、物をおもはぬ時節にも、なをたへがたくきこゆれば、かねの契りよしなしといへるにや。契りよしなきなどいへるは恋の哥のやうなれど、恋ならば物を思はぬにてはあるまじき也。此契りは鐘の事なるべき歟。夕ごとに音づれなるを、契りとも云べき事也。

秋の空、又は物思比は、夕の鐘の物がなしきもことほり也。さ様の時節にもあらで、きく夕の鐘の物がなしき、たへがたき契りとなりたるは、よしなきよしなるべき歟。秋ならず物を思はぬといひて、契りよしなき夕ぐれのかねといへる、おもしろきしたて也。よく／＼ふかく思入

ずは、契りよしなきなぞとはいひ出がたき詞也。されどもよく吟ずれば、二二句のつゞきおもく、いやなる詞也。いつとなくといひてもきこゆるを、秋ならず物をおもはぬとむつかしくいひたてたる也。そらまでも(と)いへるも、おもくきくにくし。契りよしなきも、はなやかなるやうにてうちつかぬ四句也。夕ぐれの鐘は、人あひといひたるよりも景氣をふくみたるやうなれど、人あひといふやうにやすらかにはなきこと葉也。

14 とはぬうし忘れぬかなし鐘のねにたのめもなれぬ明方の夢

此哥、何ともきこえがたし。をしていはず、待恋などの心にもあるべき歟。人のとひこぬもうく、さらば我わすれてもあらで、なげくもかなしき也。待ふかして今はと思ひ、たえてはうちねて夢をだにと思ふに、鐘の音におどろかさされては、よひ／＼夢をみるたのみもなきを、たのめもなれぬといへるにや。又たのみもなれぬのぬ文字、畢のぬにしては、暁ちかき鐘の音に、今とははじと思さだめて明がたの夢をたのむ事、夜ごとの事なれば、明がたの夢をたのめなれたる(明方の夢)といへるにて

もあるべき歟。此分にてもきこえたるやうにはなき也。
人ほがのゐかへりにて、其理きこえざる歟。

とはぬうし忘れぬかなしも、句法きよからず。鐘のね、
ね文字ちかき故歟。きよくし。かねの音とよめる哥、
廿一代集只一首といへり。

新統古 雑中

雅世卿

「みるまゝにかねのねとをく成にけり雲もかさなる峰の
ふる寺」

此哥、ぬ文字三あり。二あるはあまたあれども、これも
あまりにや。たのめもなれぬ明方の夢、やすらかならぬ
句也。

15 忘れぬらんうらめしと思ふ思とても待べきにあらずと

はむともいはじ

祇抄「此哥、句ごとに文字をあます事、詮なくや。下句、
無下の只詞也。此哥、愚見抄大失察、愚見といへる物に定家卿
自讃の哥といへり。いかでかは自讃の哥を此抄にのせら
るべき。彼愚秘抄、桐火桶のたぐひにや」云々。三句は、
深切に思ふとても今さら待べきにあらずといへる心に
や。うらめしと思ひ思ふとてもとゞきては、うらめし

と思ふとてもといふやうにならではきこえぬ也。か様の
句つゞきのまぎらはしきを嫌ふ也。その誠のため、かく
よみをかゝるとみえたり。文字あまりて、興あるばかり
にて、一首の風味深切なる味なし。たとひ末学未練の者
にても、これ程の事はいひ出されまじきにあらず。これ
を定家卿自讃たるべき事、全あるべからず。これをよし
と思ひていひ出せるにつけて、其人の心のきはもあらは
れて、浅ましくみゆる也。此哥、一首の吟おもく、さは
やかならざる哥也。

16 いへばたゞまだうたゝねの袖ながら枕もしろきのきの

ひまぐ

いへばといへる詞よりみれば、只夏のみじか夜をよめる
やうにはきこえず。恋の哥なるべき歟。またうたゝねの
袖ながらは、実のうたゝねにはあらで、うたゝねのやう
におぼゆる心なるべき歟。まくらをかはしてねたるも、
いへばまたうたゝねの程と思へるうちに、はや枕もしろ
く明行名残をしたへる心なるべき歟。うたゝねの袖もめ
づらしく、又下句に袖のたよりもなし。あくるといへば、
枕もしろきといへるは、めづらしくとしたてたる詞づか

ひにや。枕もしろき、おもしろきやうなる詞にてうちつかざる詞也。

17 分もせじ尋も入らじこよひなど生田の小野、木枯の風

御抄「一二句、先おもはしからず。生田の杜とよまずして小野といへるも、後学の輩の心をいへる哥也。木がらしの風、制の詞也。心をかすかに、詞をめぐらしくせむとする儀にや。此ふたつは誠さる事なれど、それも善悪あるべきにや侍らん」云々。此哥の心きゝわきがたし。

「君すまばとはまし物を津の国の生田の杜の秋の初かせ」

此哥の心にて、人をまつこゝろなどにや。いく田の杜を小野にかへ、秋かぜを木がらしにかへ、とはましものといへるを分もせじとかへて、今は人の分もせじ、尋も入まじきを、こよひなど秋の初風にもあらぬ木がらしの吹ぞ、といへる心にもあるべき歟。杜ともあきともなく、又とはましもなくて、君すまばの哥をとれりとはみえがたく、心得がたき事也。又分もせじ尋もいらじも、きゝよくもあらず。こよひなどゝいへる、上(へも)下(へも)につゞかず、切々にて詞おもく、いく田のをの

ゝ木がらしのかぜ、させるあしき事はなけれど、うきやかならず。其躰雨中吟也。

此風躰をさかりに好よまむ時、哥の道はやすたるべき世いたれりと知べし。

初学の人の、少くちなれて、あたらしく一かどと思ふ時は未来記の風におもむき、又心ふかくと案じ過しては雨中吟にちかくなるべし。このうれはしき姿を却而感あるやうにおもひ、又秀句にたづさはりて、かゝりのめづらしきを好む人は、此哥どもの躰に心うつり、気味あしく、心すぐならぬをおぼえず、いつとなく此風躰にうつる也。よく／＼心を付て憚べきなり。当分心にうれへあり、或は病氣などの時は、感情にもよほされておぼえず哀吟になる事也。

此哥ども、抄には詞すがたのよろしからぬ事のみをとりあつめたるやうに注したる抄おほし。此書はさにはあらず。後学のともがら(思)案し、沈吟する所、必こゝにおもむき、ふみだがへぬべき道をよく考へてよみいだし、誠としたる躰どもなるべければ、趣向もこと葉もおもしろく、このましきところありて、感情もありぬべくみゆ

る哥どもなるべし。よく吟詠して、此所に入ざるやうに
はゞかるべき事、肝要也。

(完)

(やぶもと ゆうこ・本学大学院文学研究科修士課程)

(おおやま かずや・本学大学院文学研究科修士課程)

(なかしま まり・本学大学院文学研究科聴講生)

(なかむら たけし・本学文学部非常勤講師)